巻頭言

論文としての公表を
―公設試の試験データを埋もれさせないために―

新潟県農業総合研究所 中山間地農業技術センター　石本万寿広（いしもと ますひろ）

新たな問題が発生した場合，研究を始める場合に必ず行うのは論文検索であろうと思います。研究者はほかの研究者の論文を頻繁に活用していますが，自身ではどれだけ論文発表しているでしょうか？ ここでは都道府県立の研究機関（以下，公設試）の研究員に対して思いを記したいと思います。

現在，都道府県職員で病害虫部門の研究に携わっている方は531.1人で，農研機構等の201.7人を大きく上回っています（令和4年度農林水産関係試験研究機関基礎調査）。みなさんそれぞれが地域性のある研究に取り組み，毎年，膨大なデータをとっておられます。この中には，他地域でも活用できるものや，今後の研究の進展に役立つものが含まれているはずで，できるだけ多くのデータが公表されることが望まれます。研究分野での一般的な成果公表の手段は学会誌等での論文発表ですが，多くの公設試では「研究成果情報」が重要な位置にあります。しかしながら，「研究成果情報」はA4用紙数枚にまとめられたカタログ的なもので，行政資料の一つに過ぎません。得られた知見に対してしっかりした評価を受け，それを広く，長く残すためには論文として発表すべきです。論文として発表することは自身のレベルアップの近道であり，さらに実績を自身の名前で残すことにもなります。

病害虫部門における最近の論文発表数はどのくらいでしょうか。公設試の研究員が筆頭著者になっている原著論文数をみますと，植物病理学会誌や応用動物昆虫学会誌などの関連学会誌は年間25～30報程度，各地域の病害虫研究会の会報は年間70～80報程度で，合わせて100報程度です。自身の経験から，多くのみなさんは年に1～2報を書けるくらいの試験データはあると思っています。上に示した研究員数には経験年数が少ない研究員がある程度含まれていることを考慮しても，現在の倍以上の論文数が期待できるのではないでしょうか。裏返せば，論文として発表されずに埋もれたままになっているデータが多いの実態であり，より多くの論文が発表されることが望まれます。

論文数が少ない理由としては，①論文にする必要性を感じない（職務として論文にすることが求められていない），②自身が得た知見には論文にするほどの価値がないと思っている，③論文を書いている時間がない，④データのまとめ方や論文の書き方がわからない，などが考えられます。私から提案できる，それぞれの問題点への対策は，①論文発表することの意義を理解しモチベーションとする，②自身の研究の新しさは何かを理解する（そもそも研究は新しい知見を得るために行うものであり，なんらかの新規性があるはず），論文のテーマを大きくしすぎない（あのデータが出たらまとめるではいつまで待っても書けない），③毎日，30分でも1時間でも取り組む習慣をつける（出勤後のメールチェック前，昼休み前，調査の合間など），④先輩，同僚などを頼る（他の所属の方々も含めて）。

私は大学を卒業して県に勤めた当初，最初は研究部署への配属ではなかったものの，将来，1報でいいから学会誌に発表したい，そのような研究をしてみたいと思ったことを記憶しています。思いだけで実力は伴っていなかったのですが，幸いにも多くの方々から懇切・ていねいな指導と励ましを受けることができ，思いがかなったのは試験研究機関に勤めて11年目でした。その後も得られた知見はできるだけ論文にすることを心がけ，継続して学会誌や地域の研究会報にも多くの論文を発表してきましたが，やはり学会誌に初めての論文が掲載されたときの感慨が一番です。また，それぞれの論文を見ると，当時の調査風景などが脳裏に浮かんできます。

私が所属する北陸病害虫研究会においては，講演発表は毎年相当数あるにもかかわらず論文投稿数が少なく，これを増やすことが長年の課題になっています。既に対策の一端は記しましたが，発表論文数の増加に向けて，研究員のみなさんの奮起と，周囲の方々の暖かな励まし，指導を願うものです。

（北陸病害虫研究会 会長）

植物防疫